

行阿院日蘇大法尼第五十回忌追孝之辭

南無妙法蓮華經
刑部左衛門尉殿女房御返事に曰く、

「父母に御孝養の意あらん人々は、法華經を贈り給て候。日蓮が母存生してをはせしに仰せ候し事をあまりにそむきまいらせ候しかば。今をくれまいかせて候が、あなたがちに悔しく覺へて候へば。一代聖教を検へて母の孝養を仕らんと存じ候間。母の御訪ひ申させ給ふ人々をば、我身の様に思ひ参らせ候へば。あまりにうれしく思ひまいかせ候間あらあらかきつけて申し候也。定めて過去聖靈も忽に六道の垢穢を離れて靈山淨土に御参り候らん。」

日蓮大聖人の一代聖教の判決、八宗の批判は、種々の意義はありますけれども、要するに、御母の御孝養が重要な意義ありました。

三国高僧大徳の中にも日蓮聖人程孝養を心にかけられし人は、未だ曾て無かつたでせう。日蓮聖人の御一生は、我身の親孝養の不足を感じて、毎日毎日後悔され無かつた日は、無かつたやうであります。私は、明治十八年丁酉八月六日、日本國の名山、阿蘇山の麓に生まれました。母は三十七歳であります。

した。

あつしとも云はれざりけり煮へかえる

小田の草採る乙女想へば

(御製)

田の草採りは農作業の中にも、最困難なる作業であります。母は、出産の当日迄、田の草採りをなされました。夕飯の仕度に一足先に帰宅して、先づかまどに湯を沸かされつゝ俄に産氣付かれ、祖母が介抱して出産されました。かまどの御湯は、産湯となりました。母の勤勉辛苦は推察するに余りあります。

私は、幼少の頃病弱にて蛔虫などに悩まされました。一時大患に罹り意識を失ひました。漸く快復に向った時、母は涙ながらに、「芳よい、わり(汝)が死んだなら、母(かか)さんも死ぬ」と申されました。私が意識不明の時は、母が自殺の覚悟を決せられた時であります。人の子が、親に先立て死ぬ事は、いかに大なる親不孝であります。嗚呼私は、死なずして好かったと感謝します。何と恐しい事であつたでせう。

母は、私の枕頭に、饅頭やら御餅を並べて、是を食べよと頻りに勧められます。私はまだ食欲が回復しませぬ故、「今は欲しくない。後に食べ度くなつた時に下さい」と反抗しました。母も困って、「そう、お前が食べ度くなつた時に又あげませう」と約束されました。然し此約束は、病気回復後は自然に

ぬ。それでも何の不足をも感じませんでした。片田舎の生活の当然でもあり貧乏の悲しさでもありました。

私の生家は、渓川のほとりの一軒家にて、唯一室の細い家でありました。夕暮には、淋しさが身に沁みます。先づ仏壇と神棚とに、御灯明と称する少い火をつけます。母が田畠の御仕事を終て帰られると家の内が明るくなつて居るのを悦んで私の仕事を賞められました。是の御灯明をつける仕事が私の信仰心の萌芽がありました。

私が病氣に罹れば、父母は一方ならざる心配をなされます。村の医者に疹て貰ひますけれども、大病となれば、それではおさまりませぬ。凡そ聞き及ぶ範囲の神様、仏様に御祈願なされました。「此児の病氣を治して下さい。治れば御庭を踏ませます」と誓はれました。そこで病氣平癒の後は、あちらこちらの神社仏閣に御礼参りが忙しい事であります。遠い所は三十キロの道を、病後の小さい足に小さい草鞋を穿いて歩かねばなりません。道は開通しても、九重山の裾野とて、人家も有りませぬ。母は、御礼参りに私を連れて行かれる事が、御楽しみであります。長い道中に厭かず撓まず信心の有難い御話ををして下さいました。「お前の命は神様、仏様から助けて貰つたのです。感謝せねばなりません」と云うことありました。我命と神様、仏様との関係が、病氣平癒に由て、証明された所以であります。

此御礼参りが、私の信仰生活の入門であります。

当時の社会は、官尊民卑の風潮でありました。明治新政権下に、何かの職につきわる者を官吏と称します。旧制度の士、農、工、商の中、何人でも官吏になる事が出来ます。文官、武官、何れも学校教育を受け、試験を受けねばなりません。官吏にならんが為に、学校に入り、試験を受くる事が、一般少年の目的となりました。貧乏の中にも父母は、私を学校に入れてくれました。「男子志を立て郷閥を出づ。学若し成らずんば、死すとも帰らじ」と吟じつゝ勇躍他郷に遊学しました。然るに私は、卒業するや否や、世間に尊ばるる官吏には就職せずして、明治革命の排仏毀釈の強行に由て、最も世間に卑しうられたる仏教の御寺に入て、僧となりました。是には、親族一同も憤慨し、学校の教員達も反対しました。此間母は一人、私を信じ、私の志を守て親族の反対意見を取鎮められました。

私が、三十三歳にして、海外布教に起ち、大正八年三十六歳に、南満州大連に、日本山妙法寺を建てました。此年父が北朝鮮で逝去されましたから、母を大連の道場に迎へました。

海外開教の道場の生活は、母には余りにも冷酷でありました。冬は零下二十度に下ります。ストーブは備へ付けてはありますが、殆ど焚きませぬ。素足で暮します。信者が之を見かねて、一足の足袋を、母に供養しました。私は道場の生活規則を守らんが為に、母に其足袋を穿かぬやうお頼み申しました。是の如くにして母の宗教生活は始まりました。

大正十一年九月一日、日本国関東一園に大震災が起りました。日本には此外種々の天変地天が打続で起りました。折しも私は、共産革命の蘇聯開教を志し、シベリア鉄道に乗て、ハルピン迄行きました。ハルピンで日本の大震災の報道を聞きました。此天変地天を、立正安國論の明鏡に照せば、是は日本国亡國かとも想われます。日本国亡國の時、蘇聯開教も、西天開教も、余計な仕事にしか過ぎないと考へて、即刻日本に帰朝して、立正安國の祈願に着手しました。

東京を始め、沼津、日光、塩原、那須等、凡そ天皇の在処が、私の御祈念の場所であります。其等の所には、日本山の道場は、一軒もありませぬ。野伏、山伏の生活をせねばなりませぬ。当時の特高警察は、大に不審を抱て、御祈念に干渉し、妨碍しました。その中にも田子の浦の日本山の道場が出来るや、母はそこで剃髪染衣して、御本尊様に給仕せらるる事になりました。時に七十七歳であります。然し尾行警察と、私との間に、時々喧嘩が起るのを見て、母が心配されます。是ではいけないと想ひ、母を其故郷熊本市の花岡山に、御草庵を立てて、移転して頂き、私は時々御機嫌伺に参ることにしました。所が見参に入る度に、母の衰老が目につきります。これではあぶないと想ふて、又関東の道場に母を迎へました。

関東各地の道場を転々移動する間に、最後熱海市錦ヶ浦の住人、石渡七五郎翁に迎へられました。先づ蜜柑島の開拓小屋を道場として移り住みました。母は蕨を探り、茸を探して、雑炊を作り、大衆の御

修行を助けられました。味噌も無ければ、醤油も無く、唯塩計りで味をつけます。番茶も買ふ事が出来ず、白湯を飲みました。母は、此の如き耐乏生活の中に老衰して遷化遊ばされました。御年八十二歳であります。子として孝養の足ら無かつた事が、いかにも残念であります。御遷化の地に、宝塔を立て、道場を莊嚴して、御追善を営むのも、せめてもの御詫びの志であります。

母は自ら臨終の近きを覚て、一夜、私に遺言されました。「わたしは、大木の自然に倒るるやうに死んでゆきます。但しあ上人が行かるる所には、何處にでも、わたしがついて、必護ります」と。

此遺言は、單なる言葉文ではありません。母が遷化されて五十年、母の冥加を信すればこそ、いかなる困難にも屈する事無く、第六天の天子魔軍さえも決戦降伏して、さしもの西天開教の誓願を達成するのみに非ず、今や将に一闇浮提、広宣流布の先陣に立つ事が出来ました。

母の遺言の実現の最後の証明として去年の中に、第一に聖楞伽国の中腹に、大宝塔の落慶供養を挙行しました。それが、二月二十五日、宛も母の祥月命日であります。

第一に英國の新都市計画の最後、常緑の楽園ミルトン・キーンズ市の緑地帯に、日本山妙法寺に由る御仏舍利塔建立計画が、開発公団に由て十月十日に認可されました。

第三に十一月十四日に印度民主共和国は、本年度のネルー平和受賞者を選考決定して、其結果を発表しました。いかなることか、受賞者に指名されました。

是等何れも不可思議の出来事であります。親疎の中、誰も想像する事さえ許さなかつた大仏事であります。是は全く母の遺言の実現であります。

私も今生一期の人界の生活を顧て、自ら満足し、且又感謝致します。苦樂俱に思ひ合わせて、いかにも楽しさりし一炊の夢でありました。

人久しと雖も、百年には過ぎず。其の中の事は、唯一炊の夢ぞかし。受け難き人身を受け、会い難き仏法に逢ひ、同じ仏法の中にも法華經の題目に値ひ奉り、結句題目の行者となりました。まことに、まことに、過去十万億の諸仏供養のものであります。今私も一睡の夢が、将に覚めんとする時に当りました。一睡の夢が覚めたならば、直ちに靈山淨土に走り参り、高祖日蓮大聖人を尋ね奉り、三仏の御前にして、必ず行阿院日蘇大法尼に見え奉ります。

我母、世を去て五十年

独西天に赴て法鼓を震ふ

印度為に送る平和賞

恭く靈山に供えて大恩を報す。

惟時昭和五十四年二月二十五日

日本山妙法寺 行勝院 日達 啓白

南無妙法蓮華經

表彰の言葉

ジャワ・ハルラル・ネルー国際理解賞事務局長

J・N・ディクシット

「徳は死後も人間に伴う唯一の友である。他のすべては死とともに亡びざる」

(タントラ アーキャーイカ、第三巻第四偈)

藤井日達大師はこの一偈に含まれた真理を九十年以上にわたって実行されてござりました。世の中で善と義の勢力が危殆に陥れば、その度毎に神聖なひらめきが何らかの物理的な形をとり、人類のために文明の構造を強化し、理性と調和を再建する、という信仰がインド思想の底を流れています。藤井日達大師の生涯とその業績は、この信仰を裏づけるものであります。一九世紀の終りごろ九州での少年時代から今日に至るまで、藤井日達大師は社会において非暴力主義と理性と調和の理想を維持することに献身されてこられたので、同師の理念とされる人道主義と、慈悲の精神が、日常生活の危機を超越し、人類全体に内的な平安をもたらしています。